

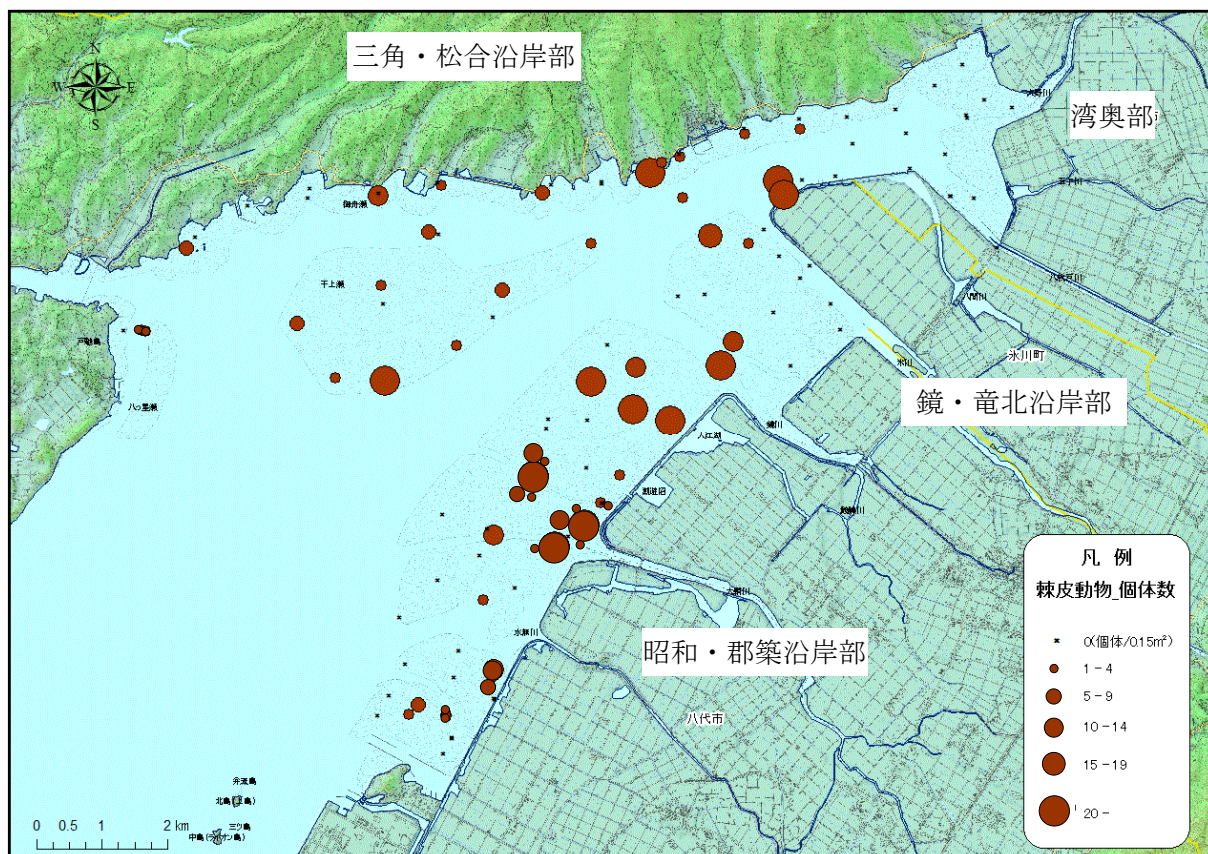


図-22 棘皮動物の個体数

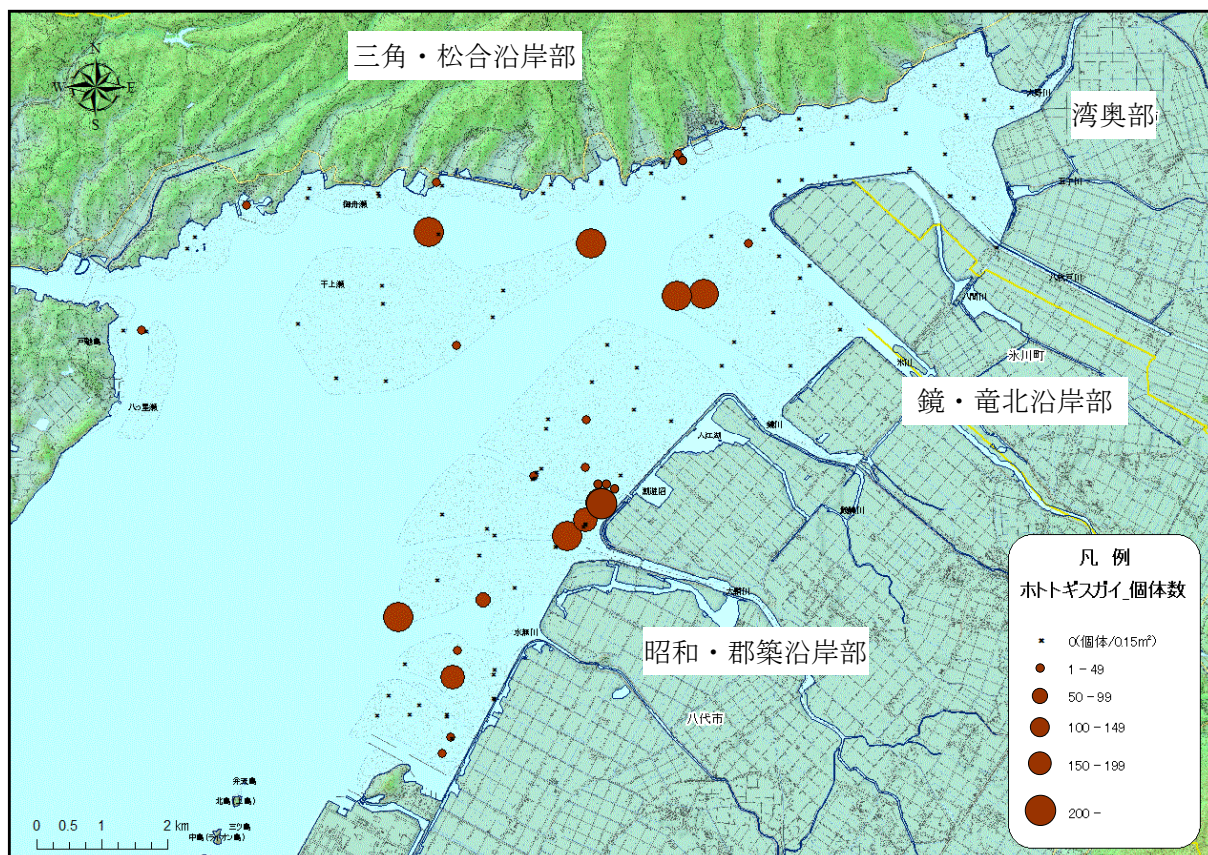


図-23 ホトギスガイの個体数

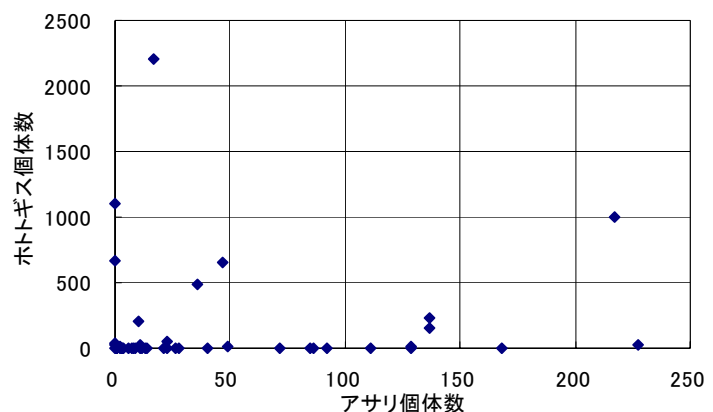
② アサリと他の底生生物との関係

今回の調査で確認された主な底生生物の個体数及び湿重量を表－10 に示す。

表－10 主な底生生物の個体数及び湿重量

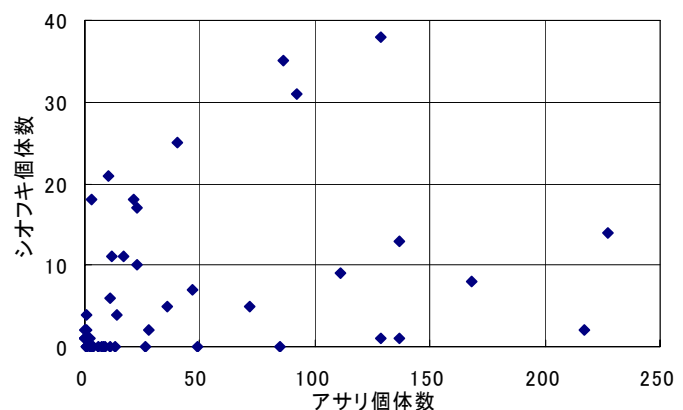
種名	個体数（個体）	湿重量（g）
ホトトギスガイ	6,922	1,407.580
シオフキ	324	2,516.141
マテガイ	25	6.257

はじめに、個体数の一番多かったホトトギスガイとアサリとの関係について図－24 に示す。一部の調査点を除き、ホトトギスガイが多数確認された調査点ではアサリが少なく、反対にアサリが多数確認された調査点ではホトトギスガイが少ないという傾向が見られた。この調査結果から、明確な相関関係が見られなかったものの、ホトトギスガイがマットを形成していると、アサリの生息に影響を与えると考えることができる。



図－24 アサリとホトトギスガイの個体数の関係

次に、ホトトギスガイに次ぎ個体数が多かったシオフキとアサリの個体数の関係を図－25 に示す。シオフキの標本数がアサリと比較して少ないものの、アサリが 150 個体以上確認された調査点ではシオフキが 13 個体以下であるため、アサリが多数生息している箇所ではシオフキの生息が少ないと考えられる。反対に、アサリが 50 個体以下の場合ではシオフキも同程度の生息が確認されており、シオフキの生息環境もアサリの生息環境に影響を与えていると考えることができる。



図－25 アサリとシオフキの個体数の関係

今回の調査で確認された主な食害生物はサキグロタマツメタ 2 個体, 5.417 g、ツメタガイ 3 個体, 0.082 g、キセワタ 8 個体, 3.293 g と少数であり、アサリの生息環境に影響を与えているものではないと思われる。ただし、今回の調査は底質について行われたものであり、ナルトビエイ等の魚類との関係については確認されていない。

(2) 底質調査

1) スミス・マッキンタイヤ型採泥器

海域ごとの底質調査結果を表－11 に示す。また、図－26～図－36 に各項目の調査結果の分布図を示す。

表－11 海域ごとの底質調査結果

環境項目 海域名	地盤高 ^{※1} (D.L. ^{※2})	土粒子密度 (g/cm ³)	含水率 (%)	粒度分布			p H	強熱減量 (%)	T O C (%)	硫化物 (mg/g)	ORP[補正後] (mV)	備 考
				中央粒径 (mm)	粒度組成 (%)	含泥率(%) ^{※3}						
八代海 北部全体	D.L. -2.0m～ +2.5m 平均+0.4m	2.622～2.785 平均 2.694	17.1～61.1 平均 35.2	0.0055～ 11.0 平均 0.33	平 均 礫 分 4.2 砂 分 58.4 シルト分 24.2 粘土分 13.1	1.9～98.2 平均 37.3	6.8～7.9 平均 7.5	1.9～9.2 平均 4.6	0.0～1.4 平均 0.4	0.01～0.76 平均 0.12	-138～386 平均 95	
三角・松合 沿岸部	D.L. -2.0m～ +1.3m 平均+0.1m	2.622～2.785 平均 2.705	17.1～61.1 平均 37.9	0.0059～ 11.0 平均 0.73	平 均 礫 分 9.9 砂 分 51.2 シルト分 24.2 粘土分 14.6	6.6～96.9 平均 38.9	7.0～7.9 平均 7.5	2.5～8.6 平均 5.5	0.0～1.2 平均 0.4	0.01～0.47 平均 0.11	-138～274 平均-60	旧三角町沿岸は礫干潟であり、松合地区では砂やシルト、粘土の割合が多い底質である。他の海域と比べると礫分が多いことが特徴である。
湾奥部	D.L. +0.8m～ +2.5m 平均+1.8m	2.639～2.696 平均 2.674	35.0～59.6 平均 51.0	0.0055～ 0.13 平均 0.031	平 均 礫 分 0.6 砂 分 20.6 シルト分 50.4 粘土分 28.3	41.2～97.8 平均 78.7	6.8～7.6 平均 7.2	1.9～8.0 平均 6.3	0.2～1.0 平均 0.7	0.02～0.19 平均 0.09	-76～96 平均 27	底質の泥化は進行し、シルト分・粘土分からなる底質が主であるが、局地的に砂分の多い箇所もある。強熱減量・TOC は大きく、硫化物は小さい。 現状で地盤高が DL+0.8m 以上あり、他の海域より高くなっている。
鏡・竜北 沿岸部	D.L. -2.0m～ +1.5m 平均+0.4m	2.629～2.721 平均 2.690	21.3～ 57.81 平均 33.0	0.0055～ 0.27 平均 0.16	平 均 礫 分 2.0 砂 分 63.8 シルト分 22.7 粘土分 11.5	3.7～98.1 平均 34.2	6.9～7.9 平均 7.4	2.1～9.2 平均 4.2	0.0～1.4 平均 0.4	0.01～0.55 平均 0.12	-115～344 平均 108	おぎや 砂泥質だが、大鞘川と不知火干拓地の南西角を結んだ線から沿岸部は、シルト・粘土分が多い。
昭和・郡築 沿岸部	D.L. -1.1m～ +1.1m 平均+0.2m	2.654～2.723 平均 2.697	20.0～58.6 平均 28.2	0.0060～ 0.40 平均 0.22	平 均 礫 分 1.9 砂 分 76.1 シルト分 15.2 粘土分 6.8	1.9～98.2 平均 22.0	7.1～7.9 平均 7.5	1.9～9.1 平均 3.5	0.0～0.9 平均 0.2	0.01～0.76 平均 0.14	26～386 平均 157	この海域の中では最も砂分が多く、含泥率が少ない。強熱減量や TOC は最も小さいエリアだが、硫化物の値は大きい傾向にある。

※1 地盤高は、深淺測量のデータ（平成 18 年度 熊本県、熊本港湾・空港整備局）と調査点の座標を照合して設定した。

※2 D.L. (Datum Level) とは基本水準面の事であり、本海域では新月時・満月時における平均最低干潮面（L.W.L）から 0.09m 下がった高さを D.L. ±0.00m としている。

※3 含泥率は、全体の粒度の中で、シルト分と粘土分を合計した割合である。

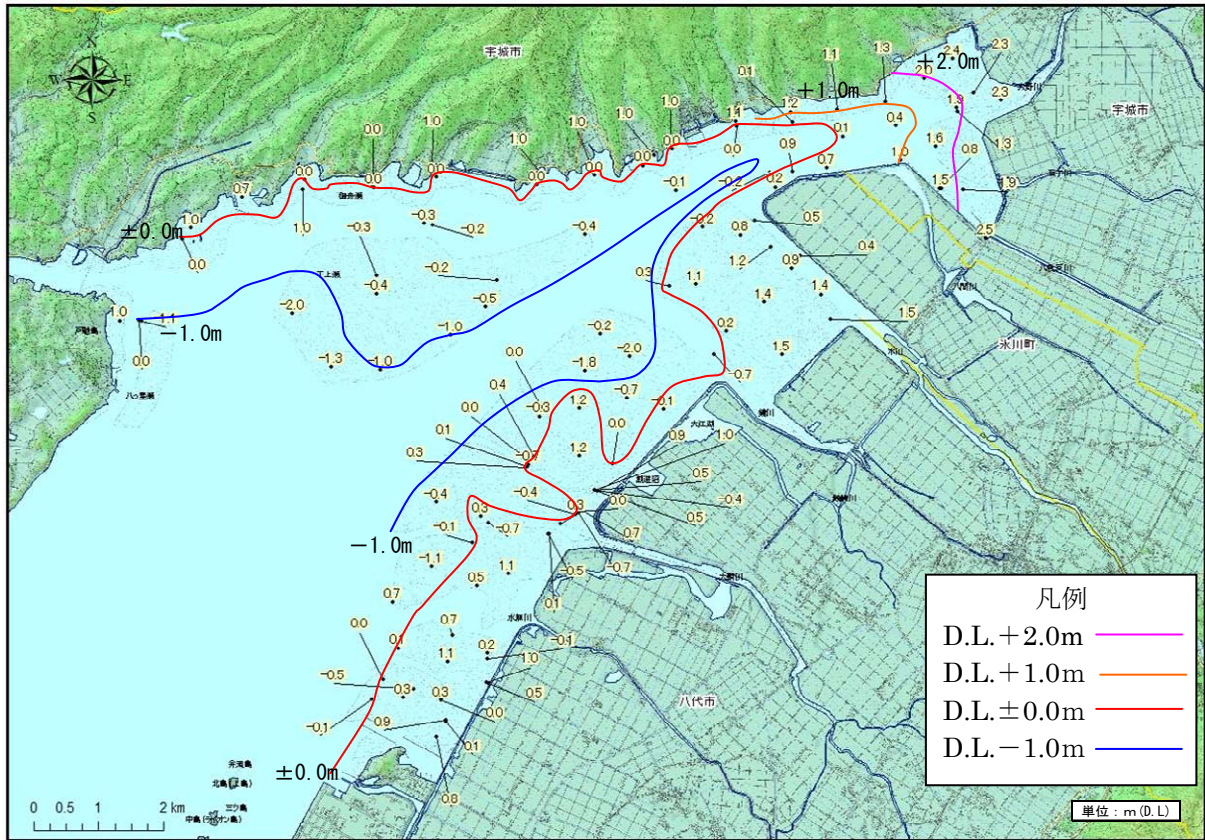


図-26 地盤高

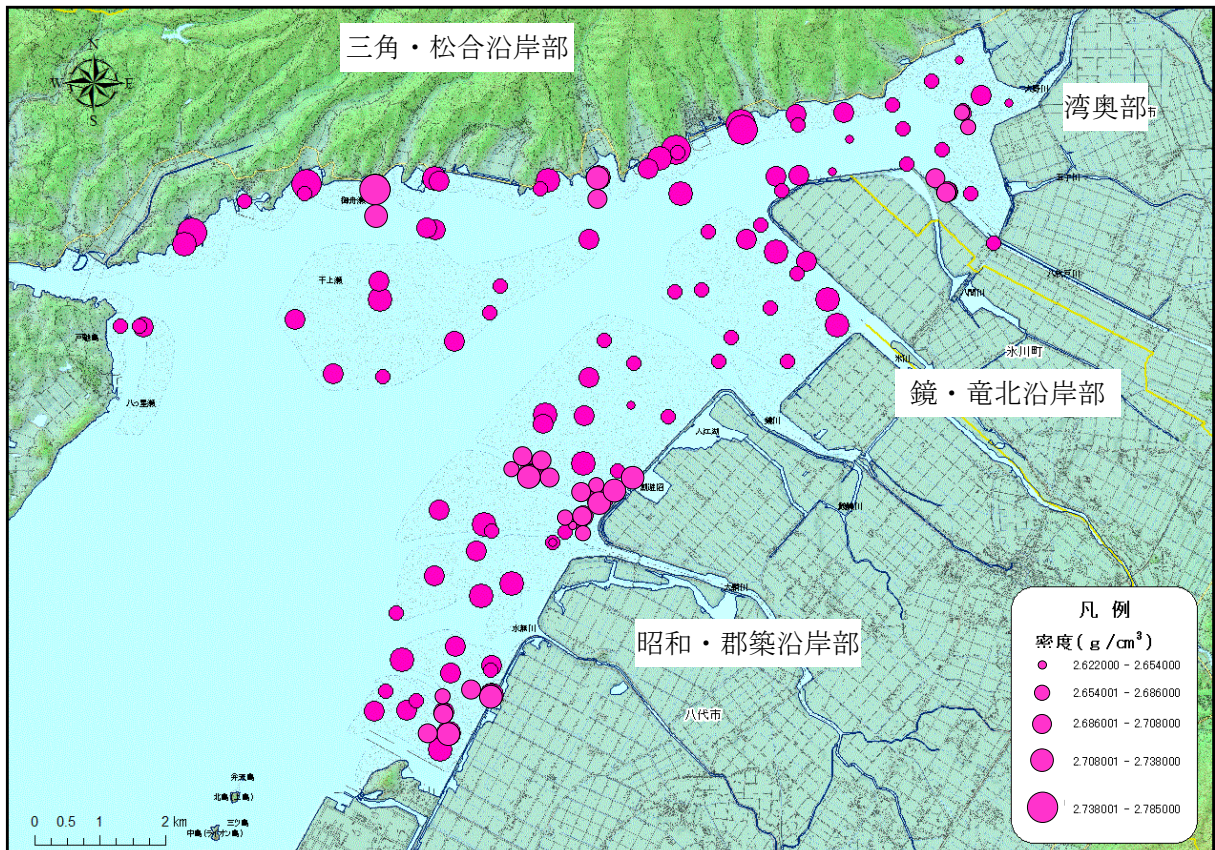


図-27 土粒子密度

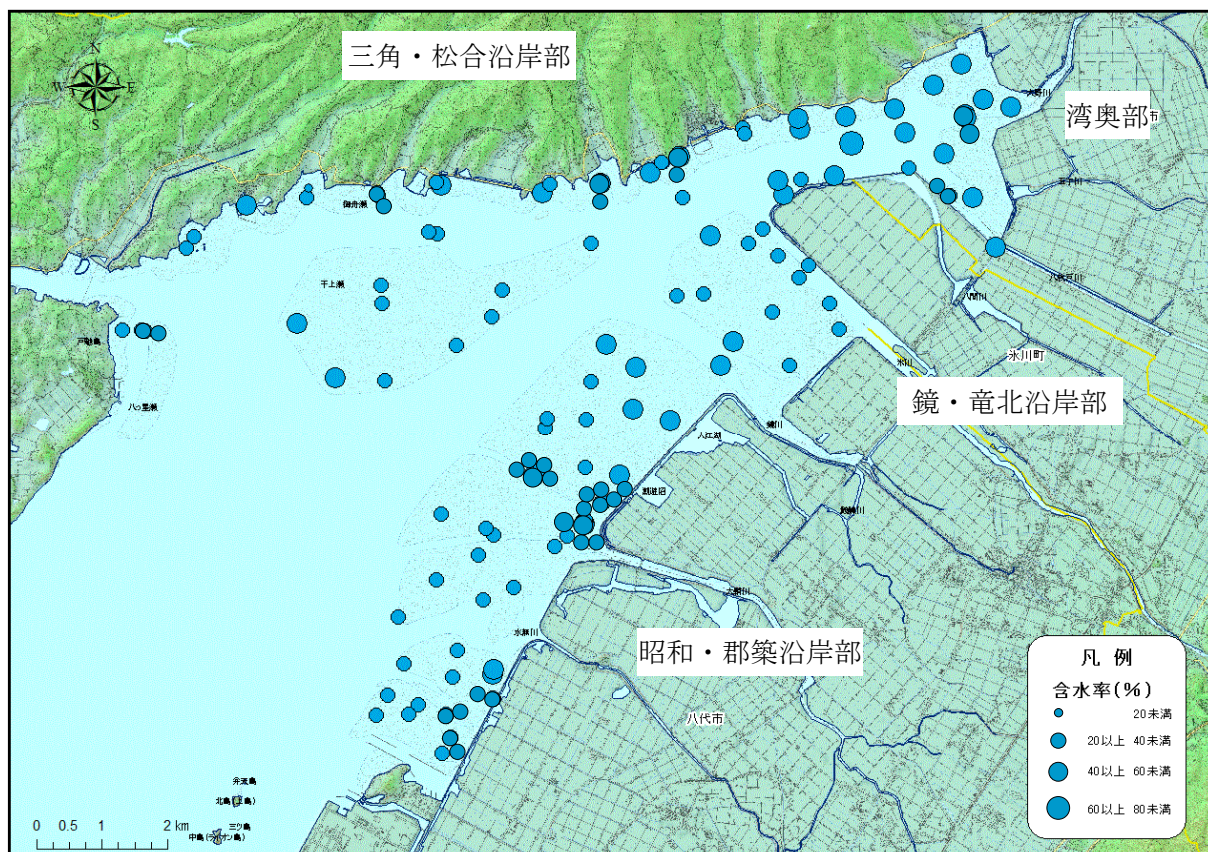


図-28 含水率

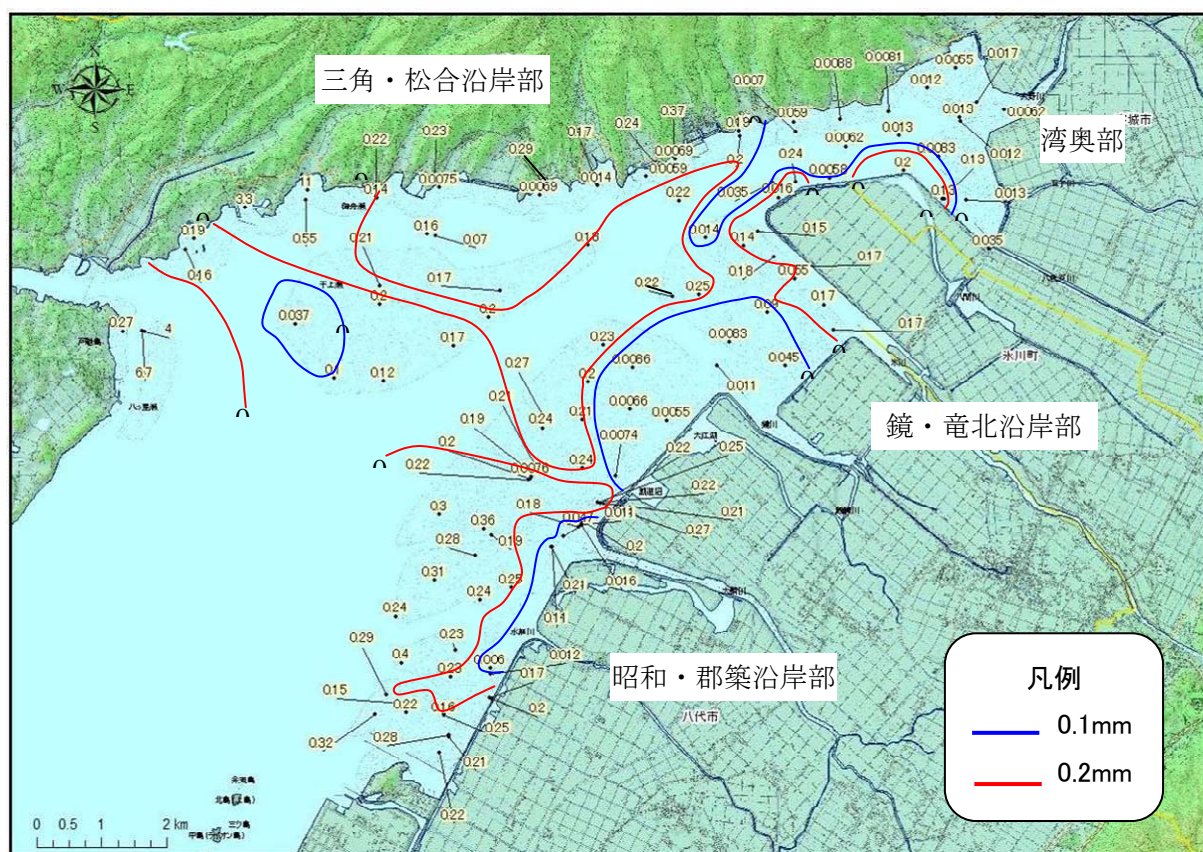


図-29 中央粒径